

日常のほとんどは伏線にならない

けどバス停の少女の水色の裾が 網膜の前をはなれ

なくて 困る

わたしは林檎

特有の直線にべったりと凭れ

かかって 温度をさぐってばかり
いる

お別れの日には少女の裾が何度も何度も翻って、翻るだけで、睫毛は上下して、
そんなうちにお別れは通り過ぎて、完全な温度で執り行われて、済んだこと
の美しさだけが残って、しまっ
ている

先生の脚捌き

とつかの振り子運動が重なってわたし

の回線を乱し てばかりいる

みたい

眠いねと呟いた君の瞳は今まで一番カフェインの色

仮初の町に真の君が眠ってる

本当の町に僕の嘘は眠りたくて

眠って

ほんとうと繰り返す君の唇だけがみにくい 呼吸ばかりしている

冷蔵庫を抱く君の腕に抱かれて夜が
もがいて うずくまる頬がまるい

いつか風が少女の頬に涙をつくったなら、私はきつと風やら卵やらを思い出
して、その桃色

の頬を許せないと思う